

地域の文化などを詠む 紫波の歴史かるた プレ大会開催



町内の歴史関係団体で構成する紫波の歴史かるた委員会は、8月27日(日)、紫波町情報交流館東広場において「紫波の歴史かるたプレ大会」を開催した。

この大会は、地域の自然風景・時代歴史・伝統文化などを詠んだ「歴史かるた」を通し、紫波町の魅力や価値を将来に向かう子ども達に伝承し、地域やふるさとへの関心・愛着を高める一助にすることを趣旨としている。

かるた詠み句に合った絵札(A3版)を取り合う小学生の部の様子

作成過程の一般用歴史かるたを紙面の都合上3点のみ紹介する。

題材	詠み札(句)	絵札(写真)
箱清水板碑群	ぬ 沼端に ここは霊場 箱清水	
山王海ダム	み 水喧嘩 あつてはならぬと 山王海	
食文化	も 餅振舞い 胡麻に小豆に 胡桃餅	

《《《10月～11月行事予定のお知らせ》》》

10月15日 (日曜日)	会員現地 研修	・平泉世界遺産ガイドセンター見学 ・古都ひらいずみガイドの会による世界遺産巡り
10月18日 (水曜日)	第144回 月例発表会	時間：午後7時～9時 場所：赤石公民館 和室 発表者 宇部 真澄 テーマ 「陸奥話記を読む ③」 発表者 金濱 興一 テーマ 「北方の民2」
11月15日 (水曜日)	第145回 月例発表会	時間：午後7時～9時 場所：赤石公民館 和室 発表者 浅沼 幸男 テーマ 未定 発表者 宮 良男 テーマ 日本の佛教② 曹洞宗(1) 永平寺と道元

令和5年8月16日および9月20日に開催した月例発表会において、発表者が用いました資料から一部分を抜粋して掲載しましたのでご了承願います。

宇部真澄の「陸奥話記を読む②」

(2) 朝廷、源頼義を追討将軍に選ぶ

かくして朝廷で会議が行われて、安倍頼良の追討する将軍を人選した。人々の議論に異論はなく、ただ源朝臣頼義を推挙する声ばかりであった。

頼義は平素、小一条院敦明親王の判官代をつとめていた。判官代の功績によって、相模守に任じられた。相模の国人は武勇を尊んだから、人々は頼義に心から服した。

国守の任が終えて上京し、数年過ごすうちに、朝議の選任にこたえて、安倍氏討伐の将軍職にあたることになった。

陸奥守に任命し、鎮守府将軍も兼ねて安倍頼良を追討させることになったが、世の人々はかねてからその才能を認めていたから、誰もがその人選に異論を唱えなかった。

(3) 頼義着任し、安倍頼良、降伏

頼義が陸奥国に至り着任したとき、まもなく天下大赦が行われた。安倍頼良は、罪が許されたことを喜んでその名を改めて頼時と変えて（国守の名と同じ名であることは禁じられていた）一身を頼義に委ねて帰順した。陸奥国は再び治まり、その任期五年の間中は何事も起きなかった。

大赦=永承七年(1052)に行われた上東門院病気による

(4) 阿久利川事件起こり、頼時再び離反

国守の任期が終わる年、天喜四年(1056)頼義は鎮守府の任務を果たすため府(胆沢城)に行った。数十日、府内を巡検している間、安倍頼時は頼義に頭を下げて仕えた。かくして、陸奥国府に引き返す途中、阿久利川の辺りで殺傷事件が起きた。

※それまで恭順の意を示していた安倍頼時が、頼義の任期が終わる年に殺傷事件を起こしたことは疑問で、安倍氏追討使として奥州入りしたにもかかわらず、大赦でその目的を達せなかった頼義が起こした謀略であるとする説や、頼義帰洛後の安倍氏の復活を恐れた権守藤原説貞(ときさだ)の謀略とする説がある。

宮良男の「日本の仏教⑳ 彼岸会とは・盛岡五ヶ寺(後編)」

彼岸会

「彼岸会」の由来は日本独自のものであり、豊作を太陽に祈願する太陽信仰(日の願い)の日願→に由来する説。インド仏教の「到彼岸」の修業から由来する説。

早良親王(崇道天皇)の怨念を鎮めるために延暦25年(806)、春と秋の前後7日間「金剛般若波羅蜜多經」を転独読したのが初めての彼岸会である。

現在は、仏教行事として祖先供養の時であろう。



お彼岸の7日間は、中日は先祖に感謝し、残る6日間は到彼岸(悟りに至る)の修業をする。

六波羅：布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧

春分の日・秋分の日、太陽が真東→真西に沈むため現世と浄土が最も通じやすい。